

dec monthly

2019.5.1 vol.404 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

地域と教育を元気にするフォーラム2019 「防災と学校教育」



dec Interview >>> 国土交通省北海道開発局 建設部長 倉内 公嘉 氏

北海道の魅力や特性について幅広く学ぶ「ほっかいどう学」。第8期北海道総合開発計画(2016年3月閣議決定)にその促進が盛り込まれ、普及啓発に向けた取り組みが進展しています。前職(開発監理部次長)でその取り組みの先頭に立って以来、「ほっかいどう学」への思いを深めてこられた倉内公嘉建設部長に伺いました。

北海道総合開発計画のなかに「もっと北海道について学ぼう」という教育に関する取り組みが盛り込まれたのは画期的と言われています。第8期計画において「ほっかいどう学」はどのように位置づけられているのでしょうか。

第8期北海道総合開発計画(計画期間:2016年度から概ね2025年度)には、将来にわたって北海道の暮らしの安定・安心や経済、産業などの発展を続けるために、また、北海道がわが国の課題解決に貢献するためには、どうすればいいのか、ということが計画として表現されていると理解しています。「世界の北海道」をキャッチフレーズに、北海道の強みである「食」と「観光」を支える「生産空間」の維持・発展の推進を目指していますが、そのための主要施策の一つが「北海道の価値創造力の強化に向けた多様な人材の確保・対流の促進」です。「北海道学」「ほっかいどう学」は、その一方策として次のように記述されています。「地域づくり活動に携わる人々の動機は、多くの場合、地域に対する愛着に根

ざしている。より多くの人々が地域づくりに関心を持つ契機を創出するため、北海道の魅力や地理、歴史、文化、産業等を『北海道学』として、子どもから大人まで幅広く学び、地域に関する理解と愛着を深める取組を促進する。」

このように「ほっかいどう学」の目的とは、北海道の地域特性や個性に焦点を当て、北海道と日本や世界とのかかわり、日本や世界における北海道の役割などを学ぶことにより北海道に対する理解と愛着を深め、北海道の強みを生かして「世界の北海道」づくりに取り組む人材を育成することにあります。

これまで北海道開発局では、専門家による「ほっかいどう学」プロジェクトチームを立ち上げ、道庁や道教育委員会、教育研究団体などと連携を広げながら、シンポジウム開催やリーフレット作成など普及啓発を図ってきました。

前職の開発監理部次長(2017年7月～18年7月)のときに、所管業務として「ほっかいどう学」推進に取り組みました。「ほっかいどう学」プロジェクトチームには、第8期計画の策定過程で北海道学的重要性について提言された新保元康氏(当時・札幌市立発寒西小学校校長)、JR北海道の車内広報誌などで北海道の魅力について健筆を振るノンフィクション・ライターの小室かず子氏、選奨土木遺産(土木学会北海道支部)の選考委員長を務めてこられた北海道教育大学准教授の今尚之氏、そしてdecの原文宏氏に参加いただき、

道民一人ひとりが先人たちの努力に思いを寄せ、当事者意識を持って北海道の発展を考えていくためにも、「ほっかいどう学」を推進する意義は、とても大きいと思います。

dec Interview

くらうち きみよし

1962年芦別市生まれ。86年室蘭工業大学大学院修了(専門は海岸工学)。同年北海道開発庁入庁。札幌開発建設部、近畿地方整備局などを経て2016年小樽開発建設部長、17年開発監理部次長、18年7月より現職。(公社)土木学会理事、北海道土木技術会建設マネジメント研究委員会幹事長を務める。

「ほっかいどう学」の内容の検討やそれぞれの分野やネットワークを通じた啓発活動に尽力いただきました。

「ほっかいどう学」は非常に領域が広く、どういうテーマを中心にするか、ということ自体が難しいですね。地域づくりやインフラに関する歴史ということでは北海道の開拓期について学ぶことが欠かせないですが、そうしたことは学校の社会科でも教えられています。実は、私自身は子どものころ、社会科は好きではなかった(笑)。教科書を覚えることが主になっていて、面白く感じられなかったのです。ですから、「ほっかいどう学」はぜひ、面白いものであってほしい。そういう意味で、北海道社会科教育連盟の活動などを通じて社会科教育に新風を吹き込んでこられた新保先生や、北海道のインフラの成り立ちを物語として掘り起こしてきた北室さんのお力に大変、期待しています。

道路分野を中心に長年、北海道開発局の職務に従事されてきたお立場としては、「ほっかいどう学」の意義をどう感じておられるでしょう。

「北海道」と命名されて150年が過ぎましたが、多くの先人たちの、言葉では言い尽くせない苦勞と努力によって今日の北海道の生活基盤がかたちづけられ、公共財としてのインフラが整備されてきました。そこには驚くような物語がたくさんあったと思います。

そして今後、人口減少時代において北海道の「生産空間」を維持、発展させていくためには、道内の多様な主体が一致団結し、北海道の地域特性や産業構造をよく理解して冷静に議論していく必要があるでしょう。道民一人ひとりが先人たちの取り組みに思いを寄せ、当事者意識を持って北海道の発展を考えるためにも「ほっかいどう学」を推進する意義はとても大きいと思います。

例えば、北海道開拓には建設従事者が大きな役割を果たし、屯田兵や囚人がその労働力の多くを担ってきた歴史があります。そこにはあらゆる手段を駆使して国益のために開拓を進める、という強い意志が感じられますが、そのような強い使命感は、担い手不足などさまざまな制約条件があるなか

で災害対応などに取り組む、現在の建設業界にも脈打っています。技術革新で仕事の仕方は変わっても、北海道の生産空間を維持するという建設業の役割の大きさは将来にわたって変わりません。「ほっかいどう学」を学ぶことで、そうしたことも気づいていただけるのではと思います。

また、克雪や利雪など「雪」も「ほっかいどう学」の大事なテーマです。例えば、近年は除雪車のオペレータの高齢化や担い手不足で省力化・効率化が急務になっていますが、そこで北海道開発局が立ち上げたのが「i-Snow」です。これは除雪現場の省力化と生産性、安全性向上に関する産学官の取り組みのプラットフォームで、新技術の活用によって除雪技術を進化させていこうとしています。準天頂衛星を活用した除雪車の自動運転もその一つで、今春、一般国道334号の知床峠で実証実験が行われました。こうした新しい取り組みの意義も「ほっかいどう学」を通じて、多くの方々に理解していただきやすくなるのではないかと思います。



i-Snow実証実験機 ロータリー除雪車

今年度はさらに「ほっかいどう学」の取り組みの輪を広げ、浸透を図るために「ほっかいどう学」推進フォーラム」という団体の立ち上げが予定されていますね。

これまでもプロジェクトチームのメンバーの方々を中心に「ほっかいどう学」の取り組みは多様な領域に広がってきました。例えば、2017年度には新保先生を中心に札幌市社会科教育連盟に「ほっかいどう学」部会が発足し、decでは「地域と教育を元気にするフォーラム2018～社会の基盤と学校教育」が開催されました(2018年2月1日/「decマンスリー」18年5月号参照)。

今後一層、分野や業界を超えて有志が集まり、北海道全体で「ほっかい

どう学」を推進するために、そのプラットフォームをつくろうと『ほっかいどう学』推進フォーラム』の立ち上げが準備されています。私は、これまでの職務上の経緯もありますが、個人的にも「ほっかいどう学」の意義に共感し、設立準備を応援しています。

プラットフォームの目標は、北海道のいろいろな物語を「ほっかいどう学」として掘り下げ、興味深いものにしていくことだと思いますが、具体的活動としては、まず教員や教職志望の学生の方々に「ほっかいどう学」の知識を持ってもらえるよう、テキストの作成などが重要ではないかと思います。現在の計画では、5月に任意団体として設立し、その後、NPO法人化を目指します。しっかりした組織できちんとした取り組みを継続できればと願っています。

北海道を訪れる人に、自信を持って北海道のことを語れる人が増えていけば素晴らしいですね。

特にインフラについて、もっと知識を持つ人が増えてほしいですね。最近ではインフラツーリズムが注目され、北海道開発局でもダムなど公共施設見学ツアーを実施していますが、ダムの治水機能について説明を受けて認識を新たにしている参加者が多いようです。農業のインフラの重要性についてもあまり知られておらず、「近年、北海道のお米がおいしくなったのはなぜか」と問われて、「地球温暖化のせいですか」と答える人がいるようです(笑)。品種改良もありますが、泥炭地を克服したことが大きい。排水促進や客土など土地改良事業が北海道米をおいしくした基盤になっていますが、それを認識する人は多くないですね。

北海道の強みをよく理解し、発信することは、第8期計画にある「世界水準の観光地の形成」を目指す上でも欠かせないことだと思います。地域の独自性に気づいて、それを観光資源としてビジネスへと高められる人材が増えれば、それが観光振興になります。つまり、北海道について自信と誇りを持って語れる人を増やすことが北海道を豊かにすることにもつながるので、それが「ほっかいどう学」の大事な肝だと思っています。